第二章　紫の物語　源氏、紫の君に心慰める

［第一段　紫の君、源氏を慕う］

幼き人は、見付い給ふ（みついたまふ、二条院の暮らしにお慣れになる）ままに（に従って）、いとよき心ざま（とても良い性格と）、容貌にて（顔立ちになって）、何心もなく（わだかまり無く）むつれまとはし（源氏に睦み纏って）聞こえたまふ（御出での様でした）。

「しばし、殿の（とのの、自分の）内の人（うちのひと、側仕えの者）にも誰れと（にも幼君の素姓は）知らせじ（知らせまい）」と思して（と源氏は御思いになって）、なほ離れたる対に（今も自らの住まう東の対と離れた西の対に）、御設ひ（おんしつらひ、室内装飾および調度配置）二なくして（二つとなく立派にして）、我も明け暮れ入りおはして、よろづの御ことどもを教へきこえたまひ（万事心構えを諭し）、手本書きて習はせなどしつつ（自ら手本を書いて習字をさせたりしつつ）、ただほかなりける（ただ他の所で暮らしていただけの）御むすめを（実の娘を）迎へたまへらむ（お迎えなされた）やうにぞ（父親のように）思したる（お思いだった）。

政所（まんどころ、財務遣り繰り）、家司（けいし、手配番頭）などをはじめ、ことに分かちて（ことごとく別にして）、心もとなからず（気詰まりの無いように）仕うまつらせたまふ（幼君を住まわせなさる）。惟光よりほかの人は（惟光以外の者は）、おぼつかなくのみ思ひ（何か変だとだけ思って）きこえたり（いたようです）。かの父宮も（幼君の実父の兵部卿宮も）、え知りきこえたまはざりけり（幼君が二条院に居る事は御存じ無いようでした）。

姫君は、なほ時々（今も時々）思ひ出できこえたまふ時（以前の暮らしを思い出しては）、尼君を恋ひきこえたまふ折多かり。君のおはするほどは紛らはしたまふを（姫君は源氏が在宅中は寂しさを紛らわせて御出でだったが）、夜などは、時々こそ泊まりたまへ（偶には西の対に泊まられるが）、ここかしこの御いとまなくて（あちこちの女遊びに忙しく）、暮るれば出でたまふを（日暮れになる度にお出掛けなさるのを）、慕ひきこえたまふ（寂しがっているような）折などあるを（時があると）、いとらうたく思ひきこえたまへり（源氏は姫をとても愛しくお思いのようでした）。

二、三日内裏にさぶらひ、大殿にもおはする折は、いといたく（姫がとてもひどく）屈しなどしたまへば（塞ぎ込まれるので）、心苦しうて（源氏も気掛かりに成って）、母なき子持たらむ（母なき子を持ったような）心地して（心境で）、歩きも（ありきも、女通いも）静心なく（しづこころなく、どこか落ち着かない）おぼえたまふ（気になって居らした）。

僧都は（そうづは、姫の祖伯父に当たる山寺の住持は）、かくなむ、と聞きたまひて（事の次第をお聞きになって）、あやしきものから（変わった事とは思いながら）、うれしとなむ思ほしける（今を時めく源氏の庇護を喜んで居らした）。かの御法事などしたまふにも（姫の祖母たる故尼上の法事には）、いかめしうとぶらひ（源氏から手厚い弔いが）きこえたまへり（贈られました）。

［第二段　藤壷の三条宮邸に見舞う］

藤壷のまかでたまへる（藤壷が里下がり成されている）三条の宮に、御ありさまもゆかしうて（御様子が知りたくて）、参りたまへれば（源氏がお参りになると）、命婦（王命婦）、中納言の君、中務などやうの人びと（などという女房たちが）対面したり（応対に出た）。

「けざやかにも（型通りに余所余所しく）もてなしたまふかな（扱うものだな）」と、やすからず思へど（と源氏は心外に御思いに成ったが）、しづめて（抑えて）、大方の御物語聞こえたまふほどに（世間話をしなさる内に）、兵部卿宮参りたまへり（兄宮がお見えに成りました）。

この君おはすと聞きたまひて（宮は源氏が居るとお聞きになって）、対面したまへり（御会いになりました）。いとよしあるさまして（宮はさすがに高貴な家柄らしく）、色めかしう（品のある）なよびたまへるを（柔かい物腰で）、「女にて見むは（女としてみても）をかしかりぬべく（良い感じだろう）」、人知れず（と源氏は人知れず）見たてまつりたまふにも（お見立てなさりながら）、かたがたむつましくおぼえたまひて（互いに親しみを覚えられて）、こまやかに御物語など聞こえたまふ（色々な事をお話し合い為さいます）。

宮も、この御さまの（源氏の様子が）常よりことに（いつになく）なつかしううちとけたまへるを（親しげで打ち解けていらっしゃるのを）、「いとめでたし（とても良い感じ）」と見たてまつりたまひて（に御思いに成って）、婿になどは思し寄らで（娘の婿に当たるとは思いも寄らずに）、「女にて見ばや（源氏が女だったら）」と、色めきたる御心には思ほす（と艶な気分で居らした）。

暮れぬれば（日が暮れて）、御簾の内に入りたまふを（宮が藤壷の居間する御簾の内にお入りに成るのを）、うらやましく（源氏は羨ましく思われ）、昔は、主上の（うへの、帝の）御もてなしに（御計らいで）、いとけ近く（藤壷にごく近付いて）、人づてならで（直に）、ものをも聞こえたまひしを（御話し申したのを）、こよなう疎みたまへるも（今ではすっかり遠ざけなさるも）、つらうおぼゆるぞ（辛く思えるが）わりなきや（もう子供ではないから、止むを得ない所かと）。

「しばしばもさぶらふべけれど（いつでも伺えますが）、事ぞと（特に御用が）はべらぬほどは（無ければ）、おのづからおこたりはべるを（遠慮いたしますが）、さるべきことなどは（御用があれば何なりと）、仰せ言もはべらむこそ（お申し付けくだされば）、うれしく（喜んで、承ります）」など（などと源氏は）、すくすくしうて（堅苦しい挨拶をして）出でたまひぬ（お帰りに成った）。

命婦も（王命婦も）、たばかりきこえむかたなく（逢瀬の手引きの仕様も無く）、宮の御けしきも（藤壷の様子も）、ありしよりは（以前よりは）、いとど憂きふしに思しおきて（随分塞いでお思いのようで）、心とけぬ御けしきも（気安く為さらない御様子に）、恥づかしく（手引きが悔やまれ）いとほしければ（気まずいので）、何のしるしもなくて（何の手立ても無いまま）、過ぎゆく（逢瀬も無く日が過ぎてゆく）。「はかなの契りや（実らぬ恋）」と思し乱るること（と思い悩むのは）、かたみに尽きせず（一方だけでは無く、源氏も然り藤壷も然りで御座います）。

［第三段　故祖母君の服喪明ける］

少納言は(若草の乳母なる少納言は若君が源氏に二条院に迎えられた事に)、「おぼえず(思いの他の)をかしき世を見るかな(幸運だろうか)。これも、故尼上の、この御ことを思して(孫の行く末を案じて)、御行ひにも祈りきこえたまひし(精進為された)仏の御しるしにや(仏の御利益に違いない)」とおぼゆ(と思う。そして更に、)。

「大殿(左大臣家の本妻は)、いとやむごとなくておはします(とても高貴に構えていらっしゃる)。ここかしこ(方々に)あまたかかづらひたまふをぞ(多くの愛人をお持ちの事のほうが)、まことに大人びたまはむほどは(姫が本当に殿の女としてお相手する時には)、むつかしきこともや(面倒な事が在るかも知れない)」とおぼえける(と考えても居た)。されど(それでも)、かくとりわきたまへる(このような格別になされる)御おぼえのほどは(源氏の姫に対する愛着振りは)、いと頼もしげなりかし(とても頼もしく感じられた)。

御服(おんぶく、喪に服す期間は)、母方は*三月こそはとて(母方の場合は三ヶ月との事なので)、晦日(つごもり、大晦日)には脱がせ(には若君の喪服を脱がせ)たてまつりたまふを(忌明けと為されたが)、また親もなくて(何せ親を失くした)生ひ出でたまひしかば(御祖母ちゃん子だったので)、まばゆき色にはあらで(新年とはいえ派手な色では無く)、紅(くれなゐ)、紫、山吹の*地の限り織れる御小袿などを着たまへるさま、いみじう今めかしくをかしげなり(却って今風で引き立っていました)。　*注釈によると≪『喪葬令』に母方の祖父母の服喪は三カ月（父方の祖父母の場合は五カ月）と規定。九月二十日ころ死去したので（「若紫」）、十二月下旬に除服となる。≫とある。　*「地の限り織れる」だと〈無地〉に思うが、小袿は上着なので全くの無地は考えにくい。小柄か同色柄で目立たない文様だったか。

［第四段　新年を迎える］

男君は(をとこぎみは、夫の源氏は)、*朝拝(てうはい)に参りたまふとて(に参内なさろうとして)、さしのぞきたまへり(姫の所にお立ち寄りになった)。　*「朝拝」は≪元旦、辰の刻(午前八時)に百官が大極殿に参集して、天皇に年賀を申し上げる儀式。略式の年に殿上人が清涼殿の東庭で拝賀するのを「小朝拝」という。「みかどをがみ」。朝賀。(小学館古語辞典)≫とある。

「今日よりは(年が明けて)、大人しくなりたまへりや(大人しくなりましたか)」とて(と軽口を言って)、うち笑みたまへる(お笑いになる)、いとめでたう(とても華やいで)愛敬づき(あいぎゃうづき、人をお惹きつけに)たまへり(なられる)。いつしか(その時の姫は既に)、雛(ひひな、人形)をし据ゑて(を並び据えて)、そそきゐたまへる(遊びに心を注いでいらっしゃる)。

*三尺の御厨子(みづし、二段棚)一具に(ひとよろひに、一揃いとして)、品々しつらひ据ゑて(小道具を飾り付けて)、また(他には)小さき屋ども(小さな家々を)作り集めて、たてまつりたまへるを(源氏が姫にお与えに為ったものを)、ところせきまで(所狭しと)遊びひろげたまへり(遊び広げて居らした)。　*「三尺」は約90cm位で、半間幅という所。小繕いの手頃な大きさという意味の常套句のようにも使われるので、此処でも厳密な大きさでは無いだろう。

「*儺遣らふ(なやらふ)とて、*犬君(いぬき)がこれを毀ち侍りに(こぼちはべりに、壊してしまった)ければ(ので)、繕ひ侍るぞ(つくろひはべるぞ、直して居りまするぞ)」とて(と言って)、いと大事と思いたり(姫は然も大事件のように思っている)。　*「儺遣らふ」は「追儺(ついな)をする事」とある。「追儺」は≪大晦日の夜に行われる朝廷の年中行事の一。鬼に扮(ふん)した舎人(とねり)を殿上人らが桃の弓、葦の矢、桃の杖(つえ)で追いかけて逃走させる。中国の風習が文武天皇の時代に日本に伝わったものという。江戸時代の初めには廃絶したが、各地の社寺や民間には節分の行事として今も伝わり、豆まきをする。鬼やらい。鬼追い。鬼打ち。(Yahoo 辞書)≫と詳しく≪疫病神を追い払うこと(古語辞典)≫ともあって、今の〈節分豆まき〉と考えて良さそうだ。　*「犬君」は姫の同年くらいの遊び相手。

「げに(確かに)、いと心なき人の(本当に不注意者の)しわざにもはべる(仕出かした事の)なるかな(ようですね)。今つくろはせはべらむ(今直させますから)。今日は(今日は朝賀のお目出度い日なので)言忌して(こといみして、不吉な事を口にしないようして)、な泣いたまひそ(決して泣いてはいけませんよ)」

とて(と言って)、出でたまふけしき(お出掛けなさる源氏のお姿が)、ところせきを(祝賀の出席で堅苦しい正式の御出仕なので)、人びと端に出でて見たてまつれば(女房たちが渡り廊下の端に勢揃いして御見送り申し上げれば)、姫君も立ち出でて見たてまつりたまひて(姫君も庇の外まで出て御見送り申し上げてから)、雛のなかの源氏の君つくろひ立てて(お人形の源氏の君を着飾らせて)、内裏に参らせなどしたまふ(参内させる真似など仕為さる)。

「今年だにすこし大人びさせたまへ(年が明けましたので少しは大人らしくなされませ)。十に余りぬる(とをにあまりぬる、十歳を過ぎた)人は、雛遊びは(お人形遊びは)忌みはべるものを(慎まれるものを)。かく御夫(おんをとこ)などまうけ(など御持ちに)たてまつりたまひては(申し為されたからは)、あるべかしう(奥様らしく)しめやかにてこそ(おしとやかに)、見えたてまつらせたまはめ(御成りあそばされませ)。御髪(みぐし)参るほどをだに(梳くことさえ)、もの憂くせさせたまふ(嫌がって御出ででは、困ります)」

など、少納言聞こゆ(などと少納言が申し上げる)。御遊びにのみ(お人形遊びにばかり)心入れたまへれば(熱心なのでは)、恥づかしと(大人気なくて恥ずかしいと)思はせたてまつらむとて(姫に思わせようとして)言へば(少納言が言えば)、心のうちに(姫は内心)、「我は、さは(そう言われてみれば)、夫(をとこ)まうけてけり(持ちであった)。この人びとの夫とてあるは(この人たちの夫というものは)、醜くこそあれ(不細工だろうが、)。我はかく(私はこんなに)をかしげに若き人をも(美しい若い人を)持たりけるかな(持っているのだった)」と、今ぞ思ほし知りける(と今更のようにお気づきになる)。さはいはど(それと言うのも)、御年の数添ふしるしなめりかし(お年を一つ召した証拠と言うところなのだろうか)。

かく幼き御けはひの(こうした姫の幼い御様子が)、ことに触れて(何かにつけて)しるければ(はっきりしてくると)、殿のうちの人びとも(東の対の源氏に仕える者たちも)、あやしと思ひけれど(妻を迎えたにしてはどうも変だと思っていたが)、いとかう(実際にはこのような)世づかぬ(男女の情交なしの)御添臥(おんそひぶし、共寝)ならむとは(だったとは)思はざりけり(思っていなかったので御座います)。